とうかい

2026年6月16日　NO.691

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会　広報部
〒460-0018　名古屋市中区門前町1番23号
東海教区教務所内
TEL 052-321-0028　FAX 052-332-4097
e-mail　info@tokai-hongwanji.net

「新体制で、教区広報の紙面づくりを進めます」

このたび、東海教区広報部は新たな部員体制となりました。

加藤学さん（桑名組・善徳寺）が退任され、新たに山田智敬さん(鈴鹿組･存仁寺)が着任されました。部長の日野道応(桑名組・最勝寺)、松野尾浩慈さん（額田組・明願寺)、三宅千空さん（名古屋組･教西寺)、橋本理恵子さん（朝明組･明圓寺）とともに、５名の部員で編集を行います。

広報紙では、教区内で行われるさまざまな行事の報告をはじめ、現代社会の課題についての考察、おすすめの図書紹介、日々の思いや声を届ける欄、また短編法話などを通して、教区の歩みを皆さまとともに共有してまいります。

私たちは、単に出来事を記録するだけでなく、その一つひとつのご縁を通して、教区の掲げる「御同朋の社会を目指す運動」に寄与する紙面づくりを目指しています。読む方にとって、教区の活動を身近に感じ、また自らの歩みを見つめるきっかけとなる広報紙でありたいと願っています。

今後とも、取材・原稿執筆・情報提供など、皆さまのご協力を賜りますようお願い申しあげます。

Contents

広報部新体制　P1
特集　社会科見学　P2.3
教区行事活動報告　P4
ご縁：研修会報告　P5
こころばなし　P6
書棚　P7
声　編集後記　P8



~特集~　日々の活動や研修会に活かす　お坊さんの社会科見学

社寺建築の現場を訪ねて

ー社寺建築は、長い時間と職人の技の上に成り立っていましたー

「亀山建設株式会社」（岐阜県関市）

岐阜県関市にある亀山建設株式会社を訪ね、社寺建築の現場を見学させていただきました。
工場の様子や職人の仕事ぶりを間近で拝見し、普段お寺の建物を目にしていながら、知らなかったことや改めて気づかされたことが多くありました。
木の香りに包まれた工場の空気、職人の皆さんの仕事への姿勢、そして社寺建築を支える技術。
見学の中で感じたことや印象に残ったことを、写真とともにご紹介したいと思います。

木の香りのする工場

工場に入った瞬間、まず印象に残ったのは木の香りでした。 大きな加工機械が並ぶ工場でありながら、やわらかな木の香りが広がっていました。優しさやあたたかみが感じられる、どこか落ち着く空間でした。
社寺建築は木を主役とする建築です。柱や梁となる木材は、長い年月をかけて育ったものが使われます。工場に広がっていた香りは、まさにその木の命を感じさせるものでした。





伝統と現代技術





見学の中で特に印象に残ったのは、かんなで木を削る職人さんの姿でした。
かんなを静かに走らせると、薄く長い木くずがすっと伸びていきます。思わず見入ってしまうほど見事で、まさに「これが職人の技」と感じる光景でした。
一方で、大工さん自身がパソコンに向かい、木材加工のためのプログラムを作成しておられる姿も見ることができました。
複雑な加工にはコンピューターや機械も活用されており、より正確な加工が可能になるそうです。
木と向き合って技を磨くことと同じように、新しい技術も学び続けておられる姿勢が印象に残りました。
伝統の手仕事と現代の技術、その両方を活かしながら社寺建築の技が受け継がれていることを知りました。

まごころこめて



作業中にもかかわらず、デスク仕事の方だけでなく、作業中の職人の皆さんも手を止め、気持ちよく挨拶してくださいました。 その姿から、仕事に向き合う誠実な姿勢を感じました。
社寺建築は多くの職人の手によって完成する建築です。 長く残る建物をつくる仕事だからこそ、一つ一つの作業を丁寧に行う姿勢が大切にされているのだと思いました。

社寺建築 ― 曲線のぶつかり合い



社寺建築の難しさについて尋ねると、
「曲線のぶつかり合い」という言葉を教えてくださいました。
寺院の屋根は直線ではなく、美しい反りをもっています。軒や破風など、さまざまな曲線が重なり合うことで、社寺建築独特の姿が生まれます。
その曲線を正確に形にするためには、木の性質を理解した高い技術が必要なのだそうです。
一方で、こうした複雑な加工にはコンピューターや機械も活用されており、伝統の技術の中に現代の技術がうまく取り入れられていることを感じました。
普段何気なく目にしているお寺の屋根も、多くの技術が重なり合って形づくられていることを知りました。





～取材を終えて～

今回の見学を通して、伝統的な社寺建築の奥深さを改めて知ることができました。

宮大工として一人前になるには長い年月の修行が必要だそうです。また、檜も柱のような太い材になるまでには100年近い年月がかかると教えていただきました。社寺建築には、そうした長い時間と職人の確かな技術が重なり合いながら形づくられていく世界があることを、実際の現場を拝見する中で感じました。そのようにして建てられたお寺や神社は、さらに長い年月にわたり、人々が手を合わせる場として受け継がれていきます。

本堂の建て替えや大規模な修理に立ち会う機会は、私たちにとってそう多いものではありません。しかし今回の見学を通して、お寺の建物というものは、木造であっても鉄筋であっても、多くの人の技術と長い時間の積み重ねによって形づくられているものなのだということを改めて感じました。
普段お参りしている本堂も、そうした人の営みと時間の中で受け継がれてきたものなのだと感じる見学となりました。

寺族青年連盟　金城六華園「花まつり法要」に参加して

海幡組　願成寺住職　加藤秀人さん

寺族青年連盟として金城六華園に伺い、「花まつり法要」を厳修させて頂きました。タイムスケジュールと致しまして、花まつり法要、腕輪念珠作り、甘茶かけ、おやつタイムというスケジュールで進行させて頂きました。
花まつり法要を始める前に、念珠の持ち方や聖典の取り扱い、合掌の仕方などを伝えて下さっている方の姿を真剣に聞いている子どもたちの姿はとても新鮮でした。

その後、子どもたちと一緒にお勤めをし、法話を皆聞き入っている姿も印象に残っています。
私は腕輪念珠の担当をさせて頂いたのですが、色々な種類のタマを用意して下さったので、子どもたちが嬉しそうに悩んでいました。タマを決めるとそれぞれ黙々とゴム紐を通している子どもや中々通らなくて困っている子どもなど、色々な姿を見る事が出来ました。出来上がった腕輪念珠を腕に通し、おもむろに近づいてきた子どもが嬉しそうに「もう１個作っていい？」と聞いてきたので「どうぞ」と答えると喜んでタマ選びに向かいました。



困っている子どもたちには六華園の職員さんや寺青のメンバーでなんとか対応していました。腕輪念珠を作り終えた子から甘茶をかけ、みんながかけ終わると三色だんごと甘茶でおやつタイム。甘茶の感想はそれぞれでしたが、参加させて頂き、子どもたちの笑顔を通して、次回も参加させて頂きたいと思いました。

東海教区門徒推進員　連絡協議会総会報告

三重組門徒推進員連絡協議会会長　伊藤裕さん

総会に先立ち 10 時から第１回委員会が開催され、教務所職員木村様のご挨拶にて、５年間の中期計画のロゴ（ともにお念仏申す身となる）のご紹介があり、委員 19 名教務所職員３名で総会議題と新年度役員推薦者の確認をしました。

その後 13 時より研修会、別院永代経・常例布教参拝となり、「弥陀　在（ましま）す」と題して、講師の加藤正人さん（桑名組善徳寺前住職）よりご法話を頂戴いたしました。

総会は 15 時より会場を移し、先に第１回委員会で確認いたしました内容に基づいて総会議事となり、すべての議事は満場一致で承認されました。

その中で重点項目が７項目あり、特に感じたのが、組連研に参画し、門徒推進員の増員を図るところにつき、私ども三重組で現在 100 名に近い会員がおりますが、その内 80 歳以上の会員が 70％を超えております。その中で施設入所される方もお見えになるなど、会費徴収もできない状況が３年程前からあります。その対策として名誉会員（会費なし）として名簿に残してという対応となっております。



特に思いますのは、コロナ感染症での連研開催ができない状況があり、その後も連研開催にこぎつけても参加者が以前のような人数とはならない状況、それに伴い門徒推進員の誕生も１年に２名程度となっております。この状況に門推員の増は当然ですが連研受講者の増員をと思うところであります。

私も 15 か月の連研では地区内の方々と新たな出会いがあり、その延長に中央教修があり全国の仲間との出会いで、集まる機会を設け、他教区訪問で旧交を温めるなどの機会を設けております。
このような機会と時間の共有にお念仏をもって、毎日がご恩報謝の気持ちがいっぱいで御座います。

子ども若者ご縁づくり推進委員会研修会 春 2026

3/7（土）ハスワークを作ろう！　@名古屋別院

西別院子ども会行事と併催


皆さんの作ったハスワーク大集合！


はがしてこよって貼る


だんだん咲いてきました

ハスワーク～泥の中から咲く蓮のように
私の中にもある蓮を咲かせよう～



ハスワーク


西別院子ども会のみんなも


講師の三宅千空さん





韓国の世界遺産～蓮燈祭。ソウルの街中に花まつりに向けて飾られる蓮。好きな色、亡くした身近な人を思う色、それぞれ選んで、はがしてこよって貼って。自分だけの花を咲かせました。

3/26（木）　名古屋組　ルミナサイクル　@教西寺


講師の山田信子さん

仏さまのお灯明のおさがりをリメイクして使い切る

ご講師山田さん Instagram
KOUTOKUSEKIZAI


色と香りのついたそぼろ状のロウ

完成!!


真剣…


夢中…


遠くからも




中学生も


寺子屋の子も


大人も


終りに掃除

教西寺春の寺子屋の後、行われたワークショップ。色のついたそぼろ状のロウをビンの中に詰めて、防災用品にもなるろうそくつくりをしました。初めての方も遠くからのご参加も、お寺ヨガやおてらおやつクラブの発送会などの参加者も、入り混じって真剣、夢中・・・

『お浄土へ
生まれていくいのち』

橋本 健人（朝明組明圓寺）

中学生になった娘は、以前から「お坊さんになりたい」と言ってくれていました。愛読書は手塚治虫先生の『ブッダ』、習い事はクラシックバレエ。いつか「踊れるお坊さん」になる日を楽しみにしておりました。

ところが先日、娘がぽつりと「やっぱりお坊さんになるのやめる」と言うのです。理由を尋ねると、「あんな悲しい気持ちになるのは嫌やもん」と、意外な言葉が返ってきました。

きっかけは、娘が生まれる前から家族同然に親しくしていた方の急逝でした。葬儀の席で、娘はお棺にしがみつき離れようとしません。これまで見たことのないほど悲しい表情で大粒の涙を流していました。生まれて初めて大切な人を失う経験が、「お坊さんをやりたくない理由」だったのです。黙って聞いていると、娘が私に言いました。「パパは、平気なの？」と。普段から私がご葬儀に参る姿がそう見えていたのでしょうか。私は一瞬、返事に詰まりました。これまでお別れしたご門徒の方々の姿が思い浮かんできたからです。別れの場に身を置くことはいつまでたっても慣れません。できることなら避けたい私がいます。

「平気じゃないよ」と、そのまま伝えました。「平気じゃないのになんでできるの？」と娘は不思議そうな顔をしました。私は「阿弥陀さまの前だから」と、答えました。

いのちを「終わるもの」としてしか見えない私に対し、阿弥陀さまは「お浄土へ生まれさせ仏にならせる」と、お誓いくださいました。そのお心を「南無(まかせよ)阿弥陀仏(われに)」と名のってくださっているのです。

その仏さまの前に身を置かせていただければこそ、平気な顔を装いながら皆さんの先頭でお勤めをさせていただく事ができております。でなければ、お坊さんなんてできません。

私が話し終えるまでじっと聞いていた娘は、「ふ～ん。じゃあ、私は通夜葬儀をしないお坊さんになるわ」と言いました。「そんな都合のいい話あるかいな」と、心の中でつっこみながらも少し前を向いてくれたことに安堵しました。

私自身、平気ではない現実を目の前にお浄土へ生まれていくことを見失ってしまうことが多分にあります。誠に情けないことです。けれど、その度にこうして豊かないのちの世界へ引き戻してくださるご縁があります。



娘とともにお念仏申す中で、お浄土への人生を分かち合えたことを、この度はしみじみとありがたく味わせていただきました。

『悩んだら歎異抄』著　富田富士也　出版社　法蔵館

「人間は社会的動物である」と、古代ギリシャ人であるアリストテレス（Bc384―Bc322）が提唱してから 2400 年近く経ちました。どれほど時を経ても、人間は他者との関係性、つながりの中にしか生きることができません。釈尊が因縁生起（縁起）を説いた後、仏教思想の形成の中で、さらに「関係性の縁起（ご縁）」が展開。私が生きるためには、今、ここに存在するためには、無数の他者のはたらきとの関わりによって生かされ、存在するのであり、自分ひとりで存在しうるものではないという人間観が生まれます。

しかし、いつの時代も人間には「人間関係」という悩みがつきものです。友人関係、職場、家族や親子関係、様々な場面で悩みや苦悩を抱えています。また、デジタル社会にあって、孤独や生きづらさを感じることも少なくありません。その中で私たちは人間関係の苦悩とどのように向き合っていけばよいでしょうか。

本書は、カウンセラーである著者が、家族関係の相談から見つけた「気づき」を、それぞれの生きづらさの光にしようとした事例が著されます。親を求める子どもの苦悩。生きる光を失った子ども。子どもの態度に悩む親。

様々な事例の中で筆者の中でスッと立ち上がってくるものは『歎異抄』の言葉でした。『歎異抄』に示される、存在そのものを丸ごと包む、肯定的な如来の心が、実際の人間関係の苦悩にあっては非常に重要だと筆者は語っていきます。人間関係の中に傷つきながらも、つながりの中に救いを見出していこうとする筆者の姿の中に、あたたかなぬくもりを感じます。



『老いるショック大賞』著　みうらじゅん　出版社　筑摩書房

夫が「そろそろ必要かと思って」と手渡してくれたのは本書「老いるショック大賞」。

「マイブーム」や「ゆるきゃら」など数々の新概念を作ってきたみうらじゅんさんが、「老い」が力に変わる一冊を作ってくれました。

「老いは誰しもが迎えるもの。それはどう考えてもしょーがないことですよね。しょーがないことには、しょーもないことをぶつける。それが老いるショックのモットーなんです。（本文より）」

「老いを感じた瞬間」の読者の投稿を、みうらじゅんさんがほっこりとした笑いにかえてくれます。

歳を重ねることはしんどいことも多くあります。だからこそ、少しでも面白がれたら肩の力を抜いて生きていけるのかもしれません。

ジタバタと抗おうとしている私をみかねたのか、互いに老いていく身であることを自覚するためか、夫は私にそっと手渡してくれました。

「歳とったなぁ…、」と思ったときには、「これが噂の老いるショックか」と思えるかもしれない。本書はそんなユニークな一冊です。



『ハイサイ！』

先日自坊では、年に一度の子どもイベント寺っ子体験が開催されました。

今年はおかげさまで５周年ということで、ゲストを迎えることに。風がよく抜ける本堂で、聞いてみたいと願っていた沖縄の民族楽器「三線（さんしん）」。弾き手はいつもお世話になっている常照寺の御住職りょうちょうさん。

三線？とあまり馴染みのない人でも、どこか懐かしいような気持ちにさせてくれました。

志村けんさんの「変なおじさん」の元となった「ハイサイ（こんにちは）おじさん」という沖縄音楽は、子ども達に大人気で大盛り上がり。なかでも、りょうちょうさんが最後にお話しくださったことが印象的でした。

「自分にとって良いこともあるし、もちろん良くないこともあります。

今日はこうして皆んなでお寺に集まっているけれど、もしかしたら中には気持ちがしゅんとしている子もいるかもしれない。でも今日はこうして皆んなで音楽を聞いて『良いことも良くないことも、かき混ぜてもっと良いことを起こしましょうよ！』って沖縄県の人はそうやって皆んなお別れをします。さぁ、やってみよう！」

「恥ずかしくないよ～！」と、三線と沖縄の歌に合わせて、皆んなで一緒に踊りいつもとは違う時間を過ごすことができました。おかげさまで心に残る５周年となりました。



『「任意？」保険』

少し前、二十代の後輩から「車を買うのですが、任意保険って必要ですか？」と聞かれました。「任意だから、入らなくてもいいものかと思って」とのことでした。

私は驚きました。もちろん法律上、加入が義務づけられているのは自賠責保険です。しかし、実際に車に乗る以上、任意保険に入ることは社会人として半ば当然のこと、という感覚を多くの人が持っているのではないでしょうか。

「あなたは事故を起こすつもりはないだろうけれど、誰かを傷つけてしまう可能性はある。自賠責だけでは補えない損害もある。そのとき責任を負えないでしょう」。そんな話をしました。

このやりとりのあと、ふと考えさせられました。私たちは案外、「自分は大丈夫」「自分は加害しない」という前提で物事を見ているのではないか、と。

誰も故意に人を傷つけたいわけではありません。けれど、人は意図せず誰かを傷つけてしまう存在でもあります。完璧な人間はいません。だからこそ、「自分もまた間違えるかもしれない」「気づかぬうちに誰かを傷つけているかもしれない」と、自分自身を省みる姿勢を持ち続けたい。任意保険の話から、そんなことを考えました。



～編集後記～

本年度より、教区広報部に加わりました鈴鹿組存仁寺の山田智敬です。初の編集会議に参加しました！右も左も分からない状態のままスタートしましたが、執筆された方々のあたたかな原稿や、委員の校正作業の和やかな雰囲気に、当初の不安はどこへやら。とても充実した時間となりました。今後も皆様のもとへ、みのりある教区広報をお届けできるよう勤しんで参ります。よろしくお願いします。